

令和5年度

文部科学省委託事業

## 多様性に応じた新時代の学び充実支援事業

定時制高校における様々な困り（不登校等長期欠席や発達（行動や認知）に特性がある等）を抱える生徒の社会的自立を実現するための「学習プログラム」構築についての調査研究

## 報告書

令和6年3月  
京都市立京都奏和高等学校



## 目次

|     |               |    |
|-----|---------------|----|
| I   | 実証研究結果の概要     |    |
| 1.  | 奏和タイム         | 4  |
| 2.  | ビジテック         | 4  |
| 3.  | ランアップ         | 5  |
| II  | 実証研究の実績       |    |
| 1.  | 奏和タイム         | 7  |
| 2.  | ビジテック         | 11 |
| 3.  | ランアップ         | 28 |
| III | 実証研究の成果及び評価   |    |
| 1.  | 奏和タイム         | 30 |
| 2.  | ビジテック         | 33 |
| 3.  | ランアップ         | 38 |
| IV  | 次年度以降の課題及び改善点 |    |
| 1.  | 奏和タイム         | 41 |
| 2.  | ビジテック         | 41 |
| 3.  | ランアップ         | 42 |

## I 実証研究結果の概要

本調査研究事業は、不登校経験や発達に特性がある等、様々な困りのある生徒の社会的自立を実現するために、京都奏和高校を象徴する3つの取組（奏和タイム、ビジテック、ランアップ）に焦点をあてた学習プログラム及び支援体制の構築を目的としている。

令和5年度における3つの取組の実証研究結果については以下のとおり。

### 1. 奏和タイム

#### (1) 実施概要

奏和タイム（夕方の時間帯）は、すべての生徒が共通した時間で、部活動や生徒会活動、自習、外部と連携したイベント、生徒企画など、自分が興味のある取組を通じて、生徒同士や教職員だけでなく、学校外の地域の方や異年齢の方など多様な人と交流し、自己肯定感を高め、コミュニケーションスキルを含めた社会活動のためのスキルを身につけることを目指している。

週1回程度、他団体や地域と連携した活動を実施しており、外部団体にコーディネートを依頼し、校内居場所カフェ、ボードゲームカフェや着付け体験など様々な取組を展開することで、持続可能な形で生徒が思い思いに過ごせる時間を構築した。加えて、大学の部活動と連携し、各部活動に所属する大学生が企画運営を行い、イベントを実施することで年齢も近く親近感を持った関係を築く経験を重ねた。

#### (2) 研究結果・次年度に向けて

今年度は開校後初めて3学年が揃い、新型コロナウイルスの5類移行に伴い活動規制も緩和したことから、「クインテット」「憩いの場」とともに参加者の割合が大きく伸び、スタッフ等との交流の様子からいい意味で「あたり前にある学校生活の一部」となっている。またアンケート等から、参加生徒の満足度は総じて高く、興味関心に応えるという目的が達成できている。

一方で、クインテットでは、イベントによっては参加者数が少なく、より生徒に合った内容を検討するとともに、生徒への参加の働きかけなどを工夫する必要がある。また、各団体が運営主体となる中で、活動場面での生徒の様子や事業の進捗確認などのため、教職員が一定関わる必要性も確認されており、よりよい連携の在り方についても引き続き検討が必要である。

憩いの場では、収容人数を大幅に上回る生徒が来室することで、相談機能が十分に機能しない問題が出てきた。そのため、交流機能と相談機能を緩やかに分けるハード面の環境整備を行う。

### 2. ビジテック

#### (1) 実施概要

ビジテックⅠ（学校設定科目・3単位）では、「しる・つくる・かんがえるを通じて、自分の可能性のフィールドを広げる」ことをテーマに実社会の創造・生産に関わる分野としてものづくり・コミュニティデザイン（ソフト面のまちづくり）・ビジネス・デザインの領域を実習や研修を通じて経験的に学ぶことを目的とした。

ビジテックⅡ（総合的な探究の時間・3単位）では、「自分の得意から自分のカタチをつくる」

ことをテーマに、ビジテックⅠの学習成果を踏まえて2分野を選択。保育所（ものづくり）、地域コミュニティ（コミュニティデザイン）、近隣住民（ビジネス）、近隣商店（デザイン）という明確な対象に対する探究活動を展開。趣旨や方法の異なる2度の成果交流会を通じて学びの送受信を通じて集団や社会の中での自身の意義や役割を経験的に学ぶことを目的とした。

ビジテックⅢ（総合的な探究の時間・3単位）では、「まちのだれかを笑顔にする」をテーマにまちに住む人のなかで笑顔にしたい・笑顔になってほしいと思う対象を設定し、その課題意識を共有するメンバーとともにアクションを設定。地域や社会の様々な人の協力を得ながら、各所で実践的に課題解決を展開することを通じて、自身が「社会の創り手」であることを経験的・実感的に認識することを目的とした。

## （2） 研究結果・次年度に向けて

ビジテックⅠでは、商業科・工業科の教職員が3年間継続的に関わり、生徒の実態やビジテックⅡ、Ⅲ、またその先の生徒たちに必要な力やものの見方・考え方につながる内容の模索を重ね、マイナーチェンジを繰り返すことで一定の完成が見えてきた。しかし、今後も継続的に運営していくためには、商業科・工業科の教職員だけではなく普通科教職員が授業に参画していく必要があり、今年度より地歴公民科・家庭科・芸術科などの汎用性の高い教科との関わりを試験的に検証、実施している。

ビジテックⅡでは、商業科・工業科の教職員がT1、普通科教職員がT2（2名）として、生徒とともに探究活動に参加しながら授業の意義や目標を経験的に学ぶことも目指している。この体制での指導も2年目となり、普通科教職員も主体的に授業参加をする機運が生まれ、また何より、生徒たちの学びに対する主体性が高く、各分野で昨年度を上回る成果を残している。

ビジテックⅢは本年度開講したが、準備段階から外部ファシリテーターに授業構築・展開を並走いただいたことで、系統적かつクリエイティブな授業展開が実現した。また、生徒の活動をよりクリエイティブに演出するための仕掛けづくりとして京都市総合企画局、京都信用金庫、龍谷大学の産学官連携体制を構築し、綿密で継続的な関わりを可能とした。成果発表会は京都信用金庫「QUESTION」にて開催し、自己評価（生徒・教職員）、他者評価（関係者・来場者）ともに非常に高い評価を得ることができた。

## 3. ランアップ

### （1） 実施概要

4月から5月にかけて全教員のおよそ半数が担当教員として入り、中学校までの学習の学び直しに取り組む「ランアップ」を実施している。「できないことをできるようにして自信につなげる」ことを目的とし、生徒は「ランアップ学習シート」を使い、毎回生徒自身が個別の目標を立てて取り組み、振り返るサイクルで学習を進め、担当教員が個別で取組内容と進捗状況を見ながら、それに応じた指導を実施している。

生徒に対してアンケート調査と意識調査を実施しており、アンケート調査では「できないことができるようになったか（目標の達成度）」を、意識調査では「自信に繋がったか（各分野に対しての得意意識）」を教科ごとに確認した。

## (2) 研究結果・次年度に向けて

今年度は、入学前に、基礎学力を測るため実施しているベネッセの基礎力診断テストの分析結果から、教員側で生徒が最初に取り組む範囲を決め、「できないことができるようになる」ように、自己肯定感を高める指導を行った。その結果、アンケート調査ではランアップ学習の効果に対する肯定的な回答が 9 割を超えており、生徒がランアップに対して学びやすさを感じていることが分かる。一方で、意識調査では、ランアップの前後で各単元や項目に対して、苦手から得意へ変化している項目も見受けられるが、大きく変化しているとは考えにくい状況である。

ベネッセの基礎力診断テストについて、実施前の対策課題への取組を各教科に任せていたため、テスト結果に対して疑問が生じることとなった。そのため、次年度より対策課題を各教科でそろえて取り組めるようにしていくこととした。

また、今年度学習意欲のある生徒に対して、京都教育大学と連携して、放課後の自主学習のサポートを行った。生徒にどの程度効果があったかを検証できるデータがないが、学習を行いたい生徒の居場所として今後も継続して取り組む予定である。

## Ⅱ 実証研究の実績

### 1. 奏和タイム

#### (1) 実施日程

| 月    | 実施内容 ※<>は実施団体                                                                                                                                                                                                    |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・奏和タイムオリエンテーション&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・ボードゲームカフェ(2回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場(1回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>                                         |
| 5 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(2回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場の実施(2回)&lt;京都ユースサービス協会&gt;</li> </ul>                                                                                    |
| 6 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(4回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場(4回)&lt;京都ユースサービス協会&gt;</li> <li>・龍大スポーツアワー&lt;龍谷大学&gt;</li> <li>・e スポーツ大会&lt;生徒企画&gt;</li> </ul>                        |
| 7 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・着付体験&lt;京都市ユースサービス協会、きものどれっしんぐ京都&gt;</li> <li>・憩いの場(1回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・終業式での夏休み居場所相談&lt;サポートセンター、京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>                              |
| 8 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・夏祭り企画&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場(1回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>                                                                                              |
| 9 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(4回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・レザークラフト体験&lt;京都市ユースサービス協会、京都市立芸術大学&gt;</li> <li>・龍大ミュージックアワー&lt;龍谷大学&gt;</li> <li>・憩いの場(3回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>   |
| 10 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(2回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・紙飛行機大会&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場(3回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>                                                 |
| 11 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・文化祭企画&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・ユース保健室事業&lt;京都市ユースサービス協会、ユース保健室&gt;</li> <li>・憩いの場(2回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> </ul>        |
| 12 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・X'mas 企画&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・憩いの場(3回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・終業式での夏休み居場所相談&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・ユース保健室事業&lt;京都市ユースサービス協会、ユース保健室&gt;</li> </ul> |
| 1 月  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(3回)&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・書初め企画&lt;京都市ユースサービス協会&gt;</li> <li>・龍大ミュージックアワー&lt;龍谷大学&gt;</li> </ul>                                                       |

|    |                                                                                                                                                             |
|----|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|    | <ul style="list-style-type: none"> <li>・卒業記念企画＜京都市ユースサービス協会＞</li> <li>・憩いの場(1回)＜京都市ユースサービス協会＞</li> </ul>                                                    |
| 2月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ボードゲームカフェ(2回)＜京都市ユースサービス協会＞</li> <li>・軽音楽部ライブ＜生徒企画＞</li> <li>・憩いの場の実施(2回)＜京都市ユースサービス協会＞</li> </ul>                  |
| 3月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・憩いの場の実施(2回)＜京都市ユースサービス協会＞</li> <li>・困りのある学生によるキャンパスツアー＜龍谷大学＞</li> <li>・年間振り返り、令和6年度計画＜京都市ユースサービス協会、龍谷大学＞</li> </ul> |

## (2) 実績と成果

奏和タイム企画内の「クインテット」・「憩いの場」は、昨年度から引き続き京都市ユースサービス協会に運用を委託し、「クインテット」は特に交流の場として、「憩いの場」は交流と相談の場を、互いに関連しつつもそれぞれの機能を持った事業として展開し、A)「クインテット」における多様な人や経験との出会いの充実と、B)生徒の実態に即した「憩いの場」の質的充実を実現することができた。さらに、A)、B)の活動の充実によって、C)学校機能の一部としての運用と生徒の利用が実現しつつある。

また、京都奏和高校と高大連携協定を締結する龍谷大学との連携により、D)龍大スポーツアワー・ミュージックアワーの実施と、昨年度に引き続き、E)困りのある学生によるキャンパスツアーを実施した。

### A)「クインテット」における多様な人や経験との出会いの充実

《京都市ユースサービス協会企画》

～カフェ実施の効果と、いつもの取組としてのボードゲームカフェ、さまざまな経験としてのそれ以外の取組（紙飛行機体験など）の比較やそれぞれの役割について～

ボードゲームカフェは特に年度当初、新入生の人間関係づくりにおいて非常に役立っていた。初回から1年生の参加が非常に多く、追加で別室を開放するほど好評であった。ボードゲームやユースサービス協会のスタッフを通して自然に会話が生まれ、部活動や学級とはまた違った人と関わるきっかけとなった。最近のボードゲームカフェでは、参加する顔ぶれが固定されてきており、毎回カフェで飲み物をもらってすぐに帰る生徒や、回によって部活に行ったりクインテットに参加したりと、その日の気分で参加する生徒の姿も見受けられる。

ボードゲームだけではなく、カフェを併せて実施することで、飲み物をもらったその場で立ち話が発生する場面や、飲み物目当てで立ち寄った生徒が誘われてゲームに参加する場面が生まれ、生徒の居場所づくりという目的を補助・拡大している。

ボードゲームカフェ以外の取組を実施することで、普段はクインテットに参加しない生徒も多く参加し、ボードゲームカフェとはまた違った、活発な空間が生まれている。

これらの結果から、ボードゲームカフェの取組は生徒の居場所づくりにより効果をもたらして



いると考えられる。次年度以降も同様の活動を継続し、現在利用している生徒の居場所を守るとともに、新入生の居場所を増やしていきたい。

#### 《その他の団体企画》

- ・「きものどれっしんぐ京都」による着付け体験（7月）

普段は奏和タイムの企画に参加しない生徒も多く参加し、浴衣に合わせたメイクや髪の設定など、非日常的なイベントにととても盛り上がり、普段話さない相手と話している様子や、友人同士で写真を取り合う場面が見られた。

- ・「京都市立芸術大学の学生」によるレザークラフト体験（9月）

当日の飛び込み参加も多く見られ、集中してレザーストラップを作成する姿や、できあがった作品をお互いに見せ合う様子が見られた。ものづくりの要素が含まれる活動を通して、生徒たちがものづくりの楽しさや、自身の適性、ひいては自身の興味関心が向く方向や進学先を探るための一助となっていると考えられる。



（写真左：今年度初回のボードゲームカフェで1年生が遊んでいる様子）

（写真右：着付け体験で浴衣を着た生徒同士がヘアメイクをしている様子）

### B) 生徒の実態に即した「憩いの場」の質的充実

#### 《エリアづくりの工夫や用途》

憩いの場では本棚などを利用し、室内を異なるコンセプトの3つのエリアに分け、誰でも安心して過ごすことが出来る空間づくりを行っている。

1つ目は、丸ソファが設置されたエリアで、ここでは生徒たちがドリンクを手にユースサービス協会のスタッフや友人と談笑する姿が見受けられる。

2つ目は、大きなテーブルが設置されている入口付近のエリアで、ここでは生徒とスタッフが一緒にカードゲーム等で遊んでいる。年賀状づくりなどのワークショップの際にはこのエリアを使用し、他のエリアで普段通りに生徒がくつろぐことが出来るようにしている。

3つ目は、カーペットの上にクッションやこたつ机が置かれたエリアで、ここでは生徒たちが上履きを脱いでくつろいでいる。

#### 《ユース保健室の実施》

ユース保健室とは、「思春期の若者を対象に、自分の身体と心、性・セクシュアリティについて気軽に話したり相談できたりする場所」というコンセプトでユースサービス協会が開催している相談の場である。

憩いの場にてスタッフが、性的少数者と呼ばれるセクシュアリティをもつ生徒の、性や家族についての相談を受けており、本校で開催するきっかけとなった。このため、いこいの場とは異なる別室を用意して年度途中から不定期で実施している。

教職員や家族には話づらいことを話せる場が学校にあるということは、生徒たちの安心につながると考えられる。また、ユース保健室で受けた相談を本校と情報共有を行い、それをもとに配慮や支援にも繋げている。

実態としては、多くの相談があるわけではないことから、憩いの場の延長に近い形で不定期の実施という形になっている。今後の課題として、落ち着いて相談ができる空間の確保や、定期的な開催の実現、ユースサービス協会と本校との情報共有を行い方や、連携方法を模索している。



(写真左：窓際の丸ソファでスタッフと談笑する生徒の様子)  
(写真中：入口すぐの机でカードゲームをする生徒の様子)  
(写真右：カーペットに座って友人と遊んでいる様子)

#### C) 学校機能の一部としての運用・利用

憩いの場は、少し年上のスタッフと友人のように接したり、教職員には話づらいことを打ち明けたりすることができる空間になっている。スタッフだけではなく、生徒間でも学年問わずその場に集まった生徒同士でゲームをする様子が見られ、ゲームを通して自然にリアクションや教え合いから会話が生まれるなど、もう一つの居場所として利用されている。

あくまでも学校機能の一つだが、憩いの場やクインテットに毎回参加する生徒もあり、その中でも、家族や教員とはまた違う人と接することができる、彼らにとって安心して過ごせて、当然のように学校に存在する空間の一つとなっている。

#### D) 龍大スポーツアワー・ミュージックアワー

龍大スポーツアワーでは、龍大バスケットボール部の皆さんと生徒が、グループに分かれ、バスケットボールを使用したアイスブレイクやミニゲームを行った。大学生から場の雰囲気が盛り上がる声かけがあり、生徒も楽しく交流することができた。非常に入りやすい雰囲気で、当日参加する生徒もあり、交流後には、大学生と生徒がハイタッチする様子も伺うことができた。

龍大ミュージックアワーは、校舎の中央に位置する交流ホールにて実施し、奏和タイムに楽器を調整した大学生が一人、また一人と集まる中、生徒たちも自然と廊下に出てくる様子が伺えた。観覧席に座って聴く生徒もいれば、立ったまま合奏を聞きつつ他のこともしている生徒もあり、音楽を通してその場に「いる」だけで同じ空間を共有できる、「緩やかな参加」を体現していた。

演奏の最後には楽器体験の時間を設けていただき、最初は呼びかけにも緊張して控えめだった

生徒たちも大学生の優しく丁寧な接し方に、次第に安心したようで、興味のある楽器に触れていた。さらに、楽器で音を出すたび大学生にたくさん褒めてもらい、生徒たちは明るい笑顔を見せて、自分のまだ触れたことのない楽しみに触れたように、大学生と談笑していた。

必ずしも積極的な姿勢でなくとも、普段は参加する機会のないイベントに触れる機会を設けることで、生徒たちが様々な居場所を手に入れるきっかけを提示し続けていきたい。長期的には、生徒たちが様々なイベントを楽しむ時間を通して、自然と生徒たちの興味関心の対象や視野を広げる種として機能することを期待している。

## 2. ビジテック

### (1) 実施スケジュール

| 月   | 実施内容                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業担当者決定</li> <li>・年間予定確認</li> <li>・評価方法確認</li> <li>・ビジテックⅠ(プレテック)の実施</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組※)前半の実施<br/>           ※ビジテックⅡにおいて、ものづくり分野、まちづくり分野、ビジネス分野、デザイン分野の4分野を2つ選び、半年で1つずつ実施しているため、「分野別取組」と記載する。</li> <li>・ビジテックⅢの授業概要説明、課題理解、個人目標の設定</li> </ul> |
| 5 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジテックⅠ(各分野の取組※)の実施<br/>           ※ビジテックⅠにおいて、キーホルダーづくり、コミュニティデザイン、コミュニティビジネス、マーケティング活動については、クラス別に入れ替えながら1月まで実施しているため、「各分野の取組」と記載。</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組)前半の実施</li> <li>・ビジテックⅢの対象の探究</li> </ul>                                                  |
| 6 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組)前半の実施</li> <li>・ビジテックⅢのチームビルディング</li> </ul>                                                                                                                                                               |
| 7 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組)前半の実施</li> <li>・1 学期振返り</li> </ul>                                                                                                                                                                        |
| 8 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組)前半の実施</li> <li>・ビジテックⅢに関する教職員研修会①の実施</li> </ul>                                                                                                                                                           |
| 9 月 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施</li> <li>・ビジテックⅡ(分野別取組)前半の実施</li> </ul>                                                                                                                                                                                          |

|      |                                                                                                                  |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|      | ・ビジテックⅡ成果交流会・アンケート調査の実施<br>・ビジテックⅡ(分野別取組)後半の実施                                                                   |
| 10 月 | ・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施<br>・ビジテックⅡ(分野別取組)後半の実施                                                                        |
| 11 月 | ・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施<br>・ビジテックⅡ(分野別取組)後半の実施                                                                        |
| 12 月 | ・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施<br>・ビジテックⅡ分野内容説明会及び分野選択希望一次調査<br>・ビジテックⅡ(分野別取組)後半の実施<br>・ビジテックⅢ「Make you smile(外部での成果交流会)」の実施 |
| 1 月  | ・ビジテックⅠ(各分野の取組)の実施<br>・ビジテックⅡ(分野別取組)後半の実施<br>・ビジテックⅢ「Make you smile」のふり返し                                        |
| 2 月  | ・ビジテック DAY(ビジテックⅡ・Ⅲの成果交流会)の実施、アンケート調査の実施<br>・ビジテックⅠ(ふり返しと分野選択)の実施<br>・ビジテックⅡでの次年度スタートアップ授業の実施                    |
| 3 月  | ・ビジテックⅠでの次年度の分野選択希望調査<br>・ふり返しと令和6年度計画                                                                           |

## (2) 実施内容

ビジテックⅠでは、「しる・つくる・かんがえるを通じて、自分の可能性のフィールドを広げる」ことをテーマに、実社会の創造・生産活動の基盤として捉えることのできるビジネス(商業分野)とテクノロジー(工業分野)と、その両者をつなぐデザインの3つの分野を設定。それらを「キーホルダーづくり」「コミュニティデザイン」「コミュニティビジネス」「マーケティング」「セルフインフォグラフィックス」の5つのコンテンツに変換して各5週ずつの実習・演習形式の授業を展開した。

### ア) ビジテックⅠ(学校設定科目)

#### ○ プレテック期間(※)

- ・立体・空間把握(展開図・組立・図案のトレース・描写)
- ・作業性能力(定規・はさみ・カッターナイフ・組立)
- ・創造的能力(アイデアの創造・構築・出力)
- ・ストレス耐性(反復作業・細密作業・思考的作業)

※プレテック …入学してきた生徒の状況を把握するため、簡単な手作業がどれくらいできるのかを確認する学習。全体への指示がどれくらい聞き取れ、それに対してどれくらい行動する

ことができるのか、また簡単な絵を描くことや、カッターナイフなどの使い方など、その後に行うものづくり分野などで、安全に作業をすることができるかどうかを確認する。

- キーホルダーづくり（ものづくり）
  - ・ 安全作業
  - ・ 素材理解
  - ・ 真鍮版の加工技術
- コミュニティデザイン（まちづくり）
  - ・ まちあるき
  - ・ まちづくり提言
- コミュニティビジネス（まちづくり・ビジネス）
  - ・ ビジネスマナー（ペアワーク）
  - ・ チームビルディング（グループワーク、ワークショップ）
- マーケティング（ビジネス）
  - ・ 企業の経済活動と CSR
  - ・ 貿易ゲーム
  - ・ SDGs の視点を取り入れたビジネスモデルの提案
- セルフインフォグラフィックス（デザイン）
  - ・ 自己紹介の理解と深化によるセルフアドボカシー
  - ・ ピクトグラム制作



← 実際に生徒が作成したセルフインフォグラフィックス（氏名は仮称）。生徒自身が自分の特性をピクトグラム化して表現している。

## イ) ビジュエックⅡ（総合的な探究の時間）

- ものづくり分野「ダンボールをつかった動くおもちゃづくり」

稲荷砂川保育所と連携し、所児との交流を通じて対象を理解し、対象のニーズや実際に合わせた動くおもちゃをダンボールで制作し、寄贈する探究活動。
- まちづくり分野「Give is Take-若者による若者の居場所実践-」

京都市ユースサービス協会がキッチンカーによって展開する「移動式ユースサービス事業」に参画し、自分たち自身が求める居場所づくりの実践とその過程や成果から社会に提言をする探究活動。

○ ビジネス分野「奏和マルシェ」

自分たちで野菜を育て、収穫したものを販売するまでの過程を構築する「奏和マルシェ」を展開し、ビジネスの実走と地域に参画する探究活動。

○ デザイン「パッケージ、ご提案します！」

日本パッケージデザイン協会の会員デザイナー三原美奈子氏のディレクションの元、稲荷繁栄会と連携し、3つの対象店舗をクライアントとしたギフトパッケージの提案を行う探究活動。

ウ) ビジテックⅢ（総合的な探究の時間）

京都市が市民参加推進のスローガンとして掲げる「みんなでつくる京都」のテーマを共有しつつ、それを授業レベルに具体化し「まちのだれかを笑顔にする」を主たるテーマとして、①課題探究、②対象探究、③チームビルディング、④アクションプランニング、⑤評価・再構築、⑥チーム探究、⑦成果交流の7つのステージで探究活動を展開した。

① 課題探究

| 時期   | コマ    | 授業形態 | T1      | 授業のテーマと内容 |                                                                                        |
|------|-------|------|---------|-----------|----------------------------------------------------------------------------------------|
| 第1週目 | 04/18 | 1    | 全体 WS   | 井上・京信     | ゴールイメージの共有<br>授業のゴールイメージの設定とのために並走してくださる京信との出会いの場とする                                   |
|      | 04/21 | 2    | 全体 WS   | 篠原・井上     | グランドルールの設定<br>授業テーマの確認<br>・授業の目標や目的を確認する<br>・昨年度末生徒が話し合った内容をベースに、授業全体のゴールやそのためのルールを考える |
| 第2週目 | 04/25 | 2    | クラス別 WS | クラス別 担当   | 個人目標の設定<br>授業の目標や目的と、自分自身の有りたい姿から、個人目標を設定する                                            |

学年共通テーマとして「まちのだれかを笑顔にする」を生徒に示し、課題との出会いを行った。特に、主たる連携機関である京都市（総合企画局）、京都信用金庫の担当者を招き、それぞれの業務や組織として目指していること、それがどのように本活動と連動しているのかを丁寧に説明していただき、その意義を、グループワークを通じてそれぞれに落とせるよう工夫した。（図-1・2）



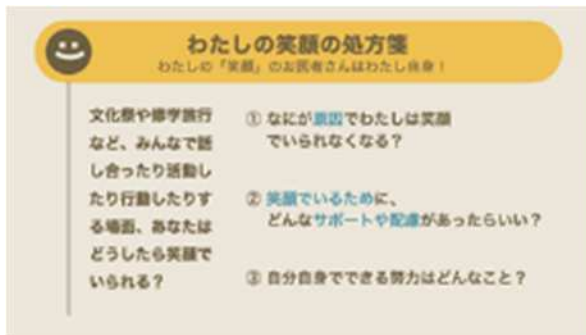


(図-1：京都信用金庫担当者による事業説明)



(図-2：「QUESTION」を題材としたゴールイメージの共有)

また、京都市の諮問機関であるまちづくりフォーラム委員を外部ファシリテーター（表内：篠原）として迎え、主担当とともに全体ワークショップ形式の授業を展開。「ゴールイメージの共有」と「全体・個人の目標の設定」を大切にした。(図-3・4・5)



(図-3：個人目標設定のワーク説明)



(図-4：目標設定に取り組み生徒の様子)

**わたしの笑顔の処方箋**

氏名 \_\_\_\_\_

学年 \_\_\_\_\_

現状 (今の自分について書く欄) (自分の笑顔について書く欄)

希望 (理想の自分について書く欄)

|       | 成分          | 用法・用量       |
|-------|-------------|-------------|
| 成分    | 笑顔の成分を記入する欄 | 笑顔の成分を記入する欄 |
| 用法・用量 | 笑顔の成分を記入する欄 | 笑顔の成分を記入する欄 |

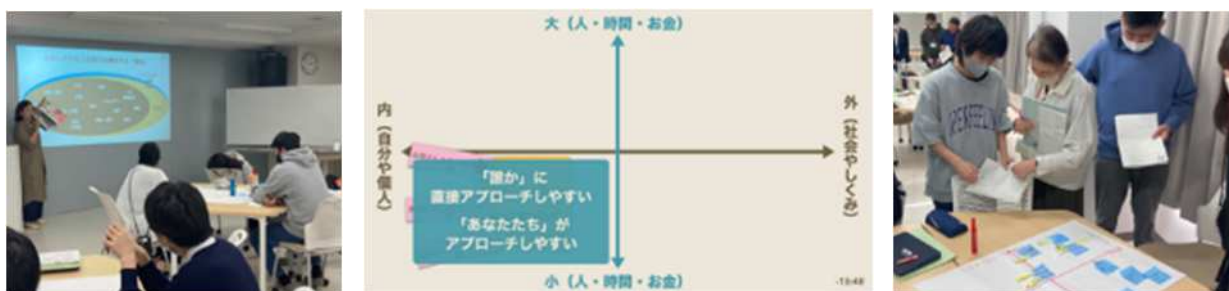
効果・評価 (自分の笑顔について書く欄)

(図-5：個人目標設定ワーク「笑顔の処方箋」のワークシート)

## ② 対象探究

| 時期   |       | コマ | 授業形態       | T1           | 授業のテーマと内容 |                                                |
|------|-------|----|------------|--------------|-----------|------------------------------------------------|
| 第2週目 | 04/28 | 2  | 全体 WS      | 篠原・井上        | 対象の探究①    | 学年共通テーマ、昨年度末のワークについて振り返り、改めて「対象」について考える視点を共有する |
| 第3週目 | 5/2   | 2  | 全体/クラス別 WS | 篠原・井上/クラス別担当 | 対象の探究①/②  | 4/28 の続き / 対象に対する仮説をデータとインタビューによって明確化する        |

本授業で大切にしてきたことの1つとして『何をするか』ではなく『だれにする』のか」が上げられる。自分のできること・やりたいことではなく、対象を笑顔にしたいと思う理由や、そのために何ができるのかを起点として企画立案させることを狙った。実社会のビジネス、とりわけマーケティングの基本はターゲットを明確にすることからはじまるためである。また、チーム形成の際に人間関係に依存すると、チーム探究において、探究テーマの設定で大きく苦勞をするからである。特に探究活動においてテーマ設定が主体的な活動を引き出す最も重要なファクターであることをいうまでもなく、この点をより大切にするために対象の発見からその理解を深める部分には集団でのワークと個人でのワークをその狙いごとに設定して活動させた。(図-6・7・8)



(図-6：ブレインストーミングやワールドカフェによる拡散と収束をによる対象を抽出するワークとその様子)

(図-7：抽出された対象を仮説検証するシート)

(図-8：仮説検証をインタビューによって検証するシート)



### ③ ゼミ形成とチームビルディング

| 時期   | コマ    | 授業形態 | T1    | 授業のテーマと内容 |                                                                |
|------|-------|------|-------|-----------|----------------------------------------------------------------|
| 第4週目 | 05/12 | 2    | 全体 WS | 篠原・井上     | ゼミ形成<br>明確化した対象を交流し、類似や重なりなどからグルーピングを行う                        |
| 第5週目 | 05/15 | 2    | 全体 WS | 篠原・井上     | チームビルディング①<br>ゼミが「安心・安全」な場になるための関係づくりとしてアイスブレイクを行う             |
| 第6週目 | 05/16 | 1    | ゼミ活動  | ゼミ担当      | チームビルディング②<br>ゼミが「安心・安全」な場になるための笑顔の処方箋を活用して、チームのグランドルールと役割を決める |

ゼミ形成は、対象の共有するものでグルーピングすることを大原則に、全体ワークを行った。また偶発的に生まれたチームであるだけに、メンバーが持っている対象を笑顔にしたいと考える理由や目指す方向性を確認するとともに、メンバーそれぞれの理解をふまえて、これからはじまるゼミ活動全体のアイスブレイクとして位置づけたワークを展開した。(図-9・10)



(図- 9：個々の理解を深めるためのインタビューワーク)



(図-10：チームで合意形成に取り組むワーク)

ゼミ形成を通じて結成されたチームとその対象は以下の通りである。(活動内容はのちのゼミ活動を通じて設定・実行されたもの)

| チーム名(生徒数)                                                                             | 外部活動日程とその場所                                                                                                       | イベントの概要                                  |
|---------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------|
| 子ども愛されプロジェクト<br>Love & Smile(4)                                                       | 11/24 <sup>金</sup> ,12/1 <sup>金</sup> ,14 <sup>水</sup><br>各 15:30～16:10 ごろ<br>本校呉竹館2階 PC2教室                       | オンラインによる居場所事業とそのこえの発信                    |
| 家庭環境や社会問題に苦悩するひとりぼっちの子ども達を対象に、オンライン・オフライン(対面)での居場所を提供し当事者の声をきくことで、「ふわっふわ」の笑顔を目指します。   |                                                                                                                   |                                          |
| 子どもワクワク<br>プロジェクト(4)                                                                  | 11/25 <sup>土</sup> 11:00～12:00<br>本校呉竹館1階 憩いの場                                                                    | 不登校の小学生向け学校紹介・居場所事業                      |
| 不登校で学校に行けない子ども達を対象に、自身らの類似経験をもとに良き相談相手として寄り添い、「ホワホワ」の笑顔を目指します。                        |                                                                                                                   |                                          |
| グローバル<br>おこしやす(8)                                                                     | 11/21 <sup>火</sup> ,24 <sup>金</sup> ,28 <sup>火</sup><br><sup>火</sup> 11:00～11:45、 <sup>金</sup> 14:30～<br>伏見稲荷大社周辺 | 外国人観光客に対するリアル観光ツアーガイド                    |
| 日本語が分からず迷子になる外国人観光客を対象に、観光がより楽しめるような創作物を制作し、独自のおもてなしを通して「ワクワク」の笑顔を目指します。              |                                                                                                                   |                                          |
| smile volcano(7)                                                                      | ① 11/21,28 <sup>火</sup> 9:30～10:30<br>② 12/1 <sup>金</sup> 14:30～<br>①砂川西公園<br>②本校本館1階工作室                          | ①地域のラジオ体操での勧誘<br>②NPO 法人竹と緑との連携による竹ベンチ制作 |
| ひとりぼっちでも役に立ちたい高齢者を対象に、地域団体と対象をつなぐために竹ベンチの制作を通じた交流によって、「ワクワク」の笑顔を目指します。                |                                                                                                                   |                                          |
| かーちゃんの笑顔を<br>サポートするゾ(7)                                                               | 10/24 <sup>金</sup> (実施済み)※1<br>うずらの里児童館分室                                                                         | 小学生向け家事体験アトラクションの実施                      |
| 忙しくて自分の時間がないお母さん達を対象に、家事の見える化や手伝いの仕組みをつくり、小学生が楽しみながら取り組めるアトラクションを提供し、「ボワボワ」の笑顔を目指します。 |                                                                                                                   |                                          |
| 高齢者を不安から<br>守り支え隊(7)                                                                  | 11/11 <sup>土</sup> 13:00～<br>ソフトバンク深草店                                                                            | ソフトバンクでの高齢者スマホ教室のサポート兼調査                 |
| 体が不自由で生活が不便な高齢者を対象に、その周囲の人がスマホの使い方をわかりやすく教えられるための仕組みづくりを通じて、「ワクワク」の笑顔を目指します。          |                                                                                                                   |                                          |

|                                                                                     |                                   |                                |
|-------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------|--------------------------------|
| <b>C.A.C.A(6)</b>                                                                   | 12/21㊥<br>QUESTION1階              | QUESTION でのカフェとゲームによるおとなの居場所実践 |
| ストレスで疲れている大人たちを対象に、リラックスした空間で話をきいたりゲームでリフレッシュできる居 Bar 所を提供し、「ルンルン」の笑顔を目指します。        |                                   |                                |
| <b>Project Study Children(5)</b>                                                    | 11/24㊤ 14:30～<br>砂川小学校            | 放課後まなび教室でのアクティビティの実施           |
| 計画的に宿題ができない小学生を対象に、楽しく学習に取り組むきっかけづくりを提案し、「ワクワク」の笑顔を目指します。                           |                                   |                                |
| <b>親世代盛り上げ隊(6)</b>                                                                  | 11/17㊤ 13:00～ 14:30～<br>本校本館3階美術室 | 高校生向け家事体験アトラクションの実施            |
| 忙しくて自分の時間が取れない親を対象に、その大変さを伝えつつ、高校生が自分でできることを増やせるアクティビティを通して親負担を軽減し、「ほくほく」の笑顔を目指します。 |                                   |                                |

#### ④ アクションプランニング

| 時期   | コマ    | 授業形態 | T1   | 授業のテーマと内容 |               |
|------|-------|------|------|-----------|---------------|
| 第6週目 | 05/23 | 1    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプランニング①  |
|      | 05/26 | 2    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプランニング②③ |
| 第7週目 | 06/02 | 2    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプラン④⑤    |
|      | 06/06 | 1    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプラン⑥     |
| 第8週目 | 06/   | 1    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプランニング⑦  |
|      | 06/16 | 2    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプランニング⑧⑨ |
| 第9週目 | 06/20 | 1    | ゼミ活動 | ゼミ担当      | アクションプラン⑩     |

アクションプランは、対象を示した表紙に加え、「わたしたちが目指す『笑顔』（＝ゴールイメージ）」「わたしたちが考える『仮説』（＝仮説の設定）」「わたしたちが傾けた『声』（＝仮説の検証）」「わたしたちが起こす『行動』（＝アクションの内容）」「わたしたちが立てる『計画』（＝行動計画）」「わたしたちが見据える『未来』（＝効果）」の6つを「額縁企画書」と称して示し、その一つ一つの取り組み方やポイントを動画で解説しながらそれぞれの進捗で進められるようにした。また、この後に行う中間評価では、スライド作成などを行わずに、この企画書を紙芝居形式にして行わせることを前もって示した。これは、プレゼンテーションやそのための準備といった、

スタイリング的な部分での企画のごまかしやその作業時間を削減し、よりプランニングの内容に力や時間を割くことを大切にさせるためである。(図-11)



(図- 11 : 「Project Study Children」のアクションプラン)

## ⑤ 評価・再構築

| 時期    |       | コマ | 授業形態  | T1    | 授業のテーマと内容   |                                           |
|-------|-------|----|-------|-------|-------------|-------------------------------------------|
| 第9週目  | 06/23 | 2  | プレゼン  | 井上・京信 | 中間評価        | 2系統に別れてアクションプラン審査をうける。受け終わった班はリフレクションを行う。 |
| 第10週目 | 06/27 | 2  | ゼミ活動  | ゼミ担当  | リフレクション①    | おとなの意見をチームで振り返り、課題を整理する。                  |
|       | 06/30 | 2  | 全体 WS | 井上・篠原 | リフレクション②③   | もちろんワークショップ(ワールドカフェ)でそれぞれが他のチームに提言を加える。   |
| 第11週目 | 07/04 | 1  | 全体 WS | 井上    | チームビルディング③  | リフレクションをもとに、ゴールイメージの確認・再設定を行う。            |
|       | 07/14 | 2  | 全体 WS | 井上・篠原 | チームビルディング④⑤ | 行動の再設定と夏休み課題の設定と役割分担・スケジュール設定などを行う。       |

アクションプランに対して、関係各所および授業外教職員を評価者とした中間評価の場を「お！ピニオン会」と称して実施した。ここでは優劣を評価するのではなく、企画の主体である生徒＝ピニオン(自ら駆動する小さな歯車)がより効果的につながりより大きな動力としていくために、客観的な第三者としてのおとなからの「意見(オピニオン)」によって点検・応援する場、と位置づけた。また教職員に対しては職員研修の場としても位置づけ、すべての教科から教職員が評価者として参加し、活動の理解を深める場とした。(図-12・13)



(図-12：お！ピニオン会の様子)



(図-13：聴衆者が記入するお！ピニオンシート)

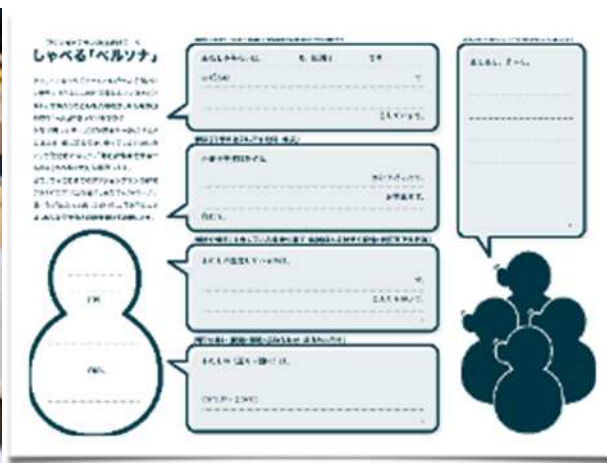
その後はおとなから受けた意見にはどのような意味があったのかを読み解くと同時に、改めて授業や個人、チームの目標を再点検しつつ、「対象の再確認」としてのペルソナの設定と、「自分たちだからこそできること・意味のあること」という視点を付加するための自身の得意を再認識



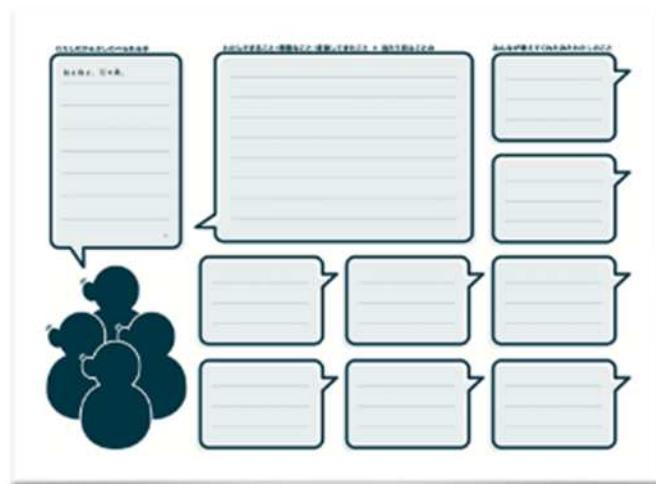
し、その掛け合いが成立しうるかどうかという視点から企画の再構築を行った。(図-14・15・16・17・18)



(図-14：お！ピニオンシートの分析の様子)



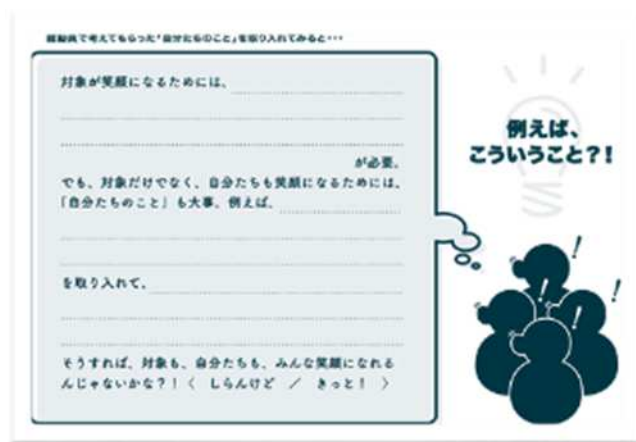
(図-15：ペルソナによって対象の再理解を行うのシート)



(図-16：自分の再理解を行うのためのシート)  
の最適解」を見つけるワーク)



(図-17：それぞれの得意を出し合って「チームとして



(図-18：最適解からアクションを導き出すシート)

## ⑥ チーム探究

第 12 週目から第 23 週目まではゼミで活動し、ゼミごとに概ね 2 ～ 3 週間程度の目標設定、作業スケジュールを立てて活動し、その設定（知識・技能）や自己評価（思考・判断・表現等）、次段階の課題設定（主体性）を「探究ポートフォリオ」によって展開、ゼミ担当者が評価を通じて評価を見取るとともに進捗を確認できるようにした。

また各ゼミの進捗は G ドライブの「進捗状況入力フォーム（図-19）」によって担当者全体で共有し、進捗を視覚的に理解し、オンタイムでフォローアップする仕組みによって展開した。

活動自体は「地域や社会をフィールドにする」を掲げていることから、積極的に対象や関係者に関わることを促し、京都市を中心にさまざまな人的ソースの提供を受けながら探究活動を展開した。

加えてこの段階から連携校である龍谷大学の有償インターン（SOU-TERN）による授業参画も進め、生徒・京都市・京都信用金庫とともに行う月例会にインターン生が加入し、企画の進捗を確認・共有するとともに、その情報を元に成果交流イベントの企画・設計を行った。具体的には全体計画（スケジュール・運営マニュアル等）、広報（SNS 運用・司会台本・進行）、会場計画（サイン作成・準備物等管理）に分かれて当日までの定期的な打合せと活動、そして当日の裏方としての運営を行った。この活動を通じて総探はもちろんのこと、イベントの企画・運営など、学生時代には理解・経験することが難しい教科指導以外の教職員の業務を経験することとともに、このような業務に魅力を感じて教職員を目指す学生の育成を狙った。（図-20）





## ⑦ 成果交流

今年度は12月21日（木）に、京都信用金庫の共創施設「QUESTION」にて、活動の成果交流会として「Make you smileーまちのだれかを笑顔にするプロジェクトー」を実施した。このイベントは京都信用金庫と京都市の連携協定「京都市と京都信用金庫との多様な主体の協働による社会課題・地域課題の解決に向けた連携協定書」内の「QUESTION タウンミーティング（※）」に位置づけ、京都市・京都信用金庫・本校の三者主催事業として実施した。（※社会課題・地域課題の解決に向けた具体的な取組を進める中で多様な主体が参加し、対話や交流する目的で行われるミーティング）

当日は、全9チームがこれまでの活動の成果を、展示・イベント・発表を通じて示し、また来場者とともに笑顔について考えるさまざまな仕掛けを展開し、活動によって笑顔になった度合いを共通通貨「emmy（エミー）」に変換して回収し、会場提供等の提供を「融資」と見立て、その元本と利子を共通通貨「emmy」によって返還するという仕組みで行った。結果として来場者約160名、7,870emmyを京都信用金庫に返還することができた。（図-22・23・24・25・26・27）



（図-24：開会式の発表ステージの（4階）様子）



（図-25：京都市長とのトークイベントの様子）



（図-26：展示ブース（7階）の様子）



（図-27：発表ステージ（4階）での成果報告の様子）



(図-28：京都信用金庫からの融資に対する原則)



(図-29：集まったエミーによる「利子返済」の様子)

1月以降は、活動成果を振り返りつつ、その成果もふまえて校内での成果発表の場として学校行事として行う「ビジテック DAY」を最終授業の場と設定し、活動を結ぶことを目指した。また成果交流イベントは2回目であること、メインターゲットが在校生であることから、各チームで希望者を募り、7名の生徒が会の企画・運営を行った。



(図-30：成果展示の様子)



(図-31：クイズ形式など工夫して下級生に伝える様子)



(図-32：成果発表の様子)



(図-33：閉会式のワークショップ成果とともに記念撮影)

発表を行う3年生が自信をもって成果報告を行っていたことはもちろんのこと、企画・運営チームの生徒が下級生にどのようなしかけを行えばしっかり見てもらえるのか、楽しんでもらえるのかを考え、運営したことで、下級生のアンケートからも、「今後の見通しを立てることができた」の回答に肯定意見が 92.4%にもものぼり、次年度以降の実施にも期待をのぞかせる結果となった。

## エ) 総合的な探究の時間に関わる教職員研修

BizテックⅢは本年度開講したため、活動内容の理解、探究活動における教職員の役割の理解、そして役割を達成するための姿勢と技術の情勢を目指し、全5回の教職員研修を実施した。研修によって授業への不安が解消されることや、困りごとを解決できるスキルを習得することを目指すのではなく、「授業担当者に関わらず、教職員一人ひとりが自分自身で考え、暫定解を都度確認しながらアップデートを続けるきっかけをつくること」を目的として実施した。

### ◆総合的な探究の時間に関わる教職員研修（全5回）

#### 第1回

Bizテックの活動理解と体感 ～BizテックⅢのゼミ形成のプロセスを通じて～

#### 第2回

お！ピニオン会 ～アクションプランの中間評価会～

#### 第3回

「エルダー」の実際とその課題解決ワーク

～BizテックⅢ授業担当者の関わりと学びを通じて～

#### 第4回

Bizテック DAY ～BizテックⅡ・Ⅲ合同成果交流会～

#### 第5回

総探における教職員の「できること」 ～奏和版探究活動のプレイブック更新～

#### ・第1回 Bizテックの活動理解と体感 ～BizテックⅢのゼミ形成のプロセスを通じて～

実施日：5月17日 対象：教職員 講師：教育企画部長

##### 〈目的〉

Bizテックの3年間の学習体型とBizテックⅢの活動の内容や趣旨を教職員全体で共有する。

##### 〈研修のゴールイメージ〉

- ・ BizテックⅢの活動内容や趣旨が理解できている。
- ・ BizテックⅢのゼミ形成のプロセスを体感し、活動の趣旨や意義に興味関心を持っている。

#### ・第2回 お！ピニオン会 ～アクションプランの中間評価会～

実施日：6月23日 対象：教職員 講師：教育企画部長

##### 〈目的〉

校内全体でBizテックⅢの活動内容とその趣旨を理解・共有する。

##### 〈研修のゴールイメージ〉

生徒たちの活動を認識し教職員一人ひとりが「応援者」になる態度や姿勢を持っている。

・第3回 「エルダー」の実際とその課題の解決ワーク

～ビジテックⅢ授業担当者の関わりと学びを通じて～

実施日：7月26日 対象：教職員

講師：教育企画部長・エルダー（＝ゼミ担当教員、同じ立場の年長者の意）

〈目的〉

- ・ビジテックⅢの「エルダー」の実際を知る。（再認識する）
- ・「エルダー」の困りごとを共有しその解決策を考え、今後の活動に生かす。

〈研修のゴールイメージ〉

目的の達成を通じて、自分自身が「エルダー」を続けていくとき・今後なったときの視点や心づもりを持っている。

・第4回 ビジテック DAY ― ビジテックⅡ・Ⅲ合同成果交流会 ―

実施日：2月9日 対象：教職員 講師：教育企画部長

〈目的〉

校内全体でビジテックⅡ・Ⅲの活動内容とその趣旨を理解・共有する。

〈研修のゴールイメージ〉

指導者として自身がどのように関わるべきかを実感的に獲得・内省するきっかけを得ている。

・第5回 総探における教職員の「できること」 ～奏和版探究活動のプレイブック更新～

実施日：3月5日 対象：教職員 講師：教育企画部長・外部ファシリテーター

〈目的〉

- ・年間の授業活動と研修を総括し、次年度に繋ぐ。
- ・探究活動における教職員の役割やその活動、またそのために必要な視点やスキルについて議論する。

〈研修のゴールイメージ〉

総探指導における「エルダーとしての教職員の役割やその関わり方」に関するリサーチクエッションを設定・共有することができている。

### 3. ランアップ

#### （1）実施スケジュール

| 月  | 実施内容                                                         |
|----|--------------------------------------------------------------|
| 4月 | ランアップ担当者会議（目標、目的、方針の確認）<br>1回意識調査実施<br>アラートリスト作成<br>各担当へ情報共有 |
| 5月 | ランアップアンケート実施<br>2回意識調査実施                                     |
| 6月 | ランアップまとめ                                                     |

## (2) 実施内容

### 目的

学びのつまずきを経験した生徒に対して、「自分はできない」という思いを解消し、学びに対して肯定的に取り組むことができ、高校への学びにつながるようにする。

### 目標

- ① できなかったことができるようになり、「できた」、「わかった」を実感することができる。
- ② 「困ったこと」にとことん付き合う大人がいることが分かる。
- ③ 得意・不得意を認識し、自分で課題を設定し取り組むことができる。
- ④ 高校の学びに意欲を持つことができる。

### 方針

- わからないところが、わかるまで生徒を支援する体制を整える。
  - 学びの基礎診断を通して生徒の学習状況を把握し、ランアップの授業で学びの蓄積が確認できる機会を設定する。
  - 高校の学びにつながるよう、生徒個々の学びのつまずきを発見し、解消する手立てを考える。
- ※ 下線部は昨年度からの変更点。

ランアップではクラスを2つに分け、10名程度の生徒に対して教員が2名担当することで、生徒が質問しやすく、学習しやすい環境にしている。

生徒が自ら取り組む課題を設定し、取り組んでいく形式で、学びに対して肯定的に取り組むことが目的となっている。取り組む内容は個々に異なる。今年度は「できなかったことができるようになる」よう、入学前に実施した基礎力診断テストを分析して、生徒個々に開始する難易度を決めた。

また、この期間に多くの教員が生徒の学習の様子を観察することで、生徒個々に持っている学習上の特性や、得意・不得意を教員側が受け取ることができる。これらを教職員で共有し、教科指導に活かすことを目指している。

ランアップ授業が始まるまでに、入学当初に受験したベネッセの『基礎力診断テスト』を分析し、特に個別指導が必要とされる生徒をピックアップした。教材については独自教材のランアップノートを主に使用する。R3, 4年度は、この中から、自分ができそうなところから取り組み始め、『できた』、『わかった』を実感させる指導を行った。しかし、生徒が自分でできる範囲の学習内容に取り組んでいては、学力向上にはつながらない。そこで、R5年度から基礎力診断テストの分析結果から、教員側で生徒が始めに取り組む範囲を決め、できないことができるようになることで、自己肯定感を高める指導を目指した。



### Ⅲ 実証研究の成果及び評価

#### 1. 奏和タイム

##### (1) 校内居場所カフェ「憩いの場」

##### ◆令和5年度 参加者数【27回実施、延べ参加数 679名（平均 25.1名）】

|       |       |      |       |       |       |       |       |       |      |
|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 4/14  | 4/21  | 4/28 | 5/12  | 5/19  | 6/9   | 6/23  | 7/14  | 8/25  | 9/1  |
| 66名   | 26名   | 25名  | 31名   | 28名   | 15名   | 22名   | 27名   | 78名   | 18名  |
| 9/8   | 9/15  | 9/22 | 10/13 | 10/20 | 10/27 | 11/10 | 11/17 | 11/24 | 12/8 |
| 17名   | 20名   | 27名  | 27名   | 22名   | 24名   | 21名   | 10名   | 20名   | 17名  |
| 12/15 | 12/20 | 1/12 | 1/26  | 2/2   | 2/9   |       |       |       |      |
| 22名   | 26名   | 21名  | 32名   | 31名   | 17名   |       |       |       |      |

1回でも参加したことがある生徒は1年生で78名（約93%）、2年生では42名（約52%）3年生で29名（約32%）

2回以上参加している生徒は1年生で55名（約66%）、2年生では24名（約29%）3年生で24名（約29%）

##### ◆令和3年度から令和5年度までの1年生参加者数の比較

|    | 4月3週  | 4月4週  | 5月1週  | 5月2週  | 5月3週  | 6月1週  | 6月2週  | 6月3週  | 6月4週  | 7月2週  |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| R3 | 39名   | 4名    |       |       |       |       |       | 7名    | 7名    | 5名    |
| R4 | 27名   |       | 3名    | 6名    | 4名    | 3名    | 0名    | 0名    | 9名    | 12名   |
| R5 | 66名   | 17名   |       | 12名   | 25名   | 14名   | 20名   | 20名   | 19名   |       |
|    | 8月4週  | 9月1週  | 9月2週  | 9月3週  | 9月4週  | 10月2週 | 10月3週 | 10月4週 | 11月1週 | 11月2週 |
| R3 |       |       |       |       | 10名   | 6名    | 10名   | 6名    | 4名    |       |
| R4 | 0名    | 9名    | 12名   | 3名    | 2名    | 3名    | 2名    | 3名    | 2名    | 1名    |
| R5 | 37名   | 9名    | 13名   | 11名   | 16名   | 14名   | 13名   | 13名   |       | 15名   |
|    | 11月3週 | 11月4週 | 12月1週 | 12月2週 | 12月3週 | 1月2週  | 1月3週  | 1月4週  | 2月1週  | 2月2週  |
| R3 |       | 11名   |       | 8名    | 24名   | 6名    | 5名    |       |       |       |
| R4 | 0名    | 3名    |       | 1名    | 3名    | 3名    |       | 0名    |       |       |
| R5 | 6名    | 14名   | 14名   | 16名   | 18名   | 14名   |       | 23名   | 25名   | 10名   |

令和4年度入学の1年生と比較して全体的に利用者が多い。4月3週目の憩いの場は1年生のみを対象にしているため来室者が多く、そこから2回目に繋がった層が一定数いることから、居場所としての認識や利用が続いている。

◆1期生（令和3年度入学生）の令和3年度から令和5年度までの参加者数比較

|    | 4月3週  | 4月4週  | 5月1週  | 5月2週  | 5月3週  | 6月1週  | 6月2週  | 6月3週  | 6月4週  | 7月2週  |
|----|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| R3 | 39名   | 4名    |       |       |       |       |       | 7名    | 7名    | 5名    |
| R4 |       | 7名    | 7名    | 6名    | 3名    | 4名    | 5名    | 5名    | 6名    | 2名    |
| R5 |       | 7名    | 10名   | 4名    | 0名    |       | 11名   | 5名    | 5名    |       |
|    | 8月4週  | 9月1週  | 9月2週  | 9月3週  | 9月4週  | 10月2週 | 10月3週 | 10月4週 | 11月1週 | 11月2週 |
| R3 |       |       |       |       | 10名   | 6名    | 10名   | 6名    | 4名    |       |
| R4 | 7名    | 7名    | 6名    | 2名    | 3名    | 4名    | 3名    | 3名    | 6名    | 3名    |
| R5 | 14名   | 5名    | 3名    | 4名    | 6名    | 10名   | 6名    | 5名    |       | 6名    |
|    | 11月3週 | 11月4週 | 12月1週 | 12月2週 | 12月3週 | 1月2週  | 1月3週  | 1月4週  | 2月1週  | 2月2週  |
| R3 |       | 11名   |       | 8名    | 24名   | 6名    | 5名    |       |       |       |
| R4 | 5名    | 8名    |       | 1名    | 4名    | 8名    |       | 5名    |       |       |
| R5 | 2名    | 4名    | 1名    | 6名    | 7名    | 5名    |       | 5名    | 2名    | 3名    |

目立った変化はないが、昨年度比では微増となっている。進路にまつわる悩みや休憩できる場として機能していた。

◆外部団体（京都ユースサービス協会）からの生徒の情報収集の仕組み構築の状況

- ・日々の生徒の活動状況については、事業実施直後に当日の憩いの場スタッフが生徒の様子をデータに入力し、担当教員が全教職員に共有することで、憩いの場で掴んだ情報を照会できるようにした。
- ・京都ユースサービス協会と担当教員で月1回の報告会を設定し、全体の取り組み概要と生徒の活動の様子について共有した。
- ・「憩いの場」をより有機的に活用することは、在学中はもちろん、卒業後のセーフティネットとのつながりを構築する上でも重要である。その意義や有効性を教職員がより理解し、憩いの場の独立性を担保しつつ、関わり合っていく必要がある。本年度も教職員研修の計画を検討したが、実施が叶わなかった。そこで毎年4月の始業式後に実施する、奏和タイムのオープニング企画をクイントットと教育企画部で共催し、教職員研修を兼ねることで、生徒・教職員ともに「憩いの場」の意義や役割を理解する場面を設定した。

(2) クイントット

合計20回実施、延べ参加者数約704名※文化祭を除く

平均35.2名（昨年度：23.4名）

◆ボードゲームカフェ 10回実施、延べ参加者数36名 平均36.8名（昨年度：13名）

| 4/20 | 4/26 | 5/10 | 5/18 | 6/22 | 9/21 | 9/28 | 10/19 | 10/26 | 12/13 |
|------|------|------|------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 41名※ | 31名  | 32名  | 21名  | 34名  | 39名  | 名    | 41名   | 43名   | 43名   |



◆季節のイベント企画 10回実施、延べ参加者数 446 名 平均 44.6 名（昨年度：33.8 名）

| 日付     | 内容              | 参加者数  |
|--------|-----------------|-------|
| 4月13日  | Opening(新入生限定)  | 57 名※ |
| 6月14日  | 紙飛行機            | 35 名  |
| 7月13日  | 着付け             | 25 名  |
| 8月31日  | ビリヤード           | 29 名  |
| 9月13日  | レザークラフト         | 26 名  |
| 11月2日  | 椅子ニス塗り          | 14 名  |
| 11月17日 | 文化祭モンスターシューティング | 110 名 |
| 1月11日  | 書初め             | 32 名  |
| 1月19日  | 卒業生メッセージ        | 49 名  |
| 1月25日  | けん玉             | 30 名  |
| 2月8日   | 軽音部×ステージドリンク    | 39 名  |

- ・ドリンクサーブ用のカートを導入したため、ドリンクとお菓子をきっかけに参加する生徒が多かった。バウムクーヘンやドーナツなど重ためのお菓子が人気だった。
- ・紙コップを用いた参加後アンケートでは「おいしかった」「次も参加したい」「疲れた」の順に回答数が多かった。
- ・昨年度と比較して参加生徒の割合が増加した。
- ・昨年度実施した企画段階から生徒とコラボするイベントが実施できなかった。
- ・来年は生徒の声を拾い、一緒に形にできるよう模索したい。
- ・京都ユースサービス協会が企画し、文化祭のモンスターシューティングで使うモンスターの色塗りを一緒にしたり、憩いの場で用いる椅子のペンキ塗りを屋外で実施したりと、一緒に手を動かす機会を創出することができた。

◆外部団体（京都ユースサービス協会）からの生徒の情報収集の仕組み構築の状況

- ・奏和タイム企画の内、大学連携・教職員企画を除くすべての奏和タイム企画を一貫してユースサービス協会に依頼することにより、継続的・計画的な運用が可能となり、生徒とのつながりも深まったことでより詳細に生徒の経時的変化を見取ることができた。また、本年度はユースサービス協会からの報告の体裁を改め、共通したフォームで報告を受けており、これによって教員側も、経時的な視点での生徒の情報を得ることができた。
- ・しかし、そのような情報をどのように活用するかについての議論が十分に出来ていない点が課題として残っている。過剰な情報の共有は提供者にとっても受信者にとっても有益なものとはならないため、担任団・サポートセンターなどが協議の上、効率的かつ効果的な情報収集・共有のあり方を考える必要がある。

## 2. ビジテックⅢ

ビジテックⅢでは、大きく2つの評価によって授業成果の評価を行った。1つは探究活動における諸能力がどのように変化していったのかを、授業開始時(4/18)・中間評価時(6/27)・成果交流イベント実施後(12/22)の3地点で同一内容のアンケートを実施し、そのプレ・ポストをとった。もう1つは、成果交流イベントの際にA:生徒、B:授業担当者、C:担当外教職員、D:インターン学生、E:来場者・関係者、の5つの対象に同趣旨のアンケートを取りクラスター分析を行った。

### (1) 探究活動に関わる姿勢に関するプレ・ポスト調査

アンケート項目とその結果は以下の通りである。(単位: %、A・Bは4/18の回答との増減)

| アンケート項目                     | 実施時期  | とても安心してとりくめる(a) | 安心してとりくめる(b) | どちらでもない(c) | 安心して取り組めない(d) | 全く安心して取り組めない(e) | A:肯定意見(a+b)の初回答との増減 | B:否定意見(d+e)の初回答との増減 |
|-----------------------------|-------|-----------------|--------------|------------|---------------|-----------------|---------------------|---------------------|
| ア) チームで協力して考えたり行動すること       | 4/18  | 30              | 42           | 18         | 4             | 6               | -                   | -                   |
|                             | 6/27  | 28.9            | 44.4         | 24.4       | 0             | 2.2             | 1.3                 | -7.8                |
|                             | 12/22 | 32.1            | 42.9         | 21.4       | 0             | 3.6             | 3                   | -6.4                |
| イ) 目標を立てて、その目標に向かって取り組むこと   | 4/18  | 30              | 46           | 18         | 2             | 4               | -                   | -                   |
|                             | 6/27  | 26.7            | 57.8         | 13.3       | 2.2           | 0               | 8.5                 | -3.8                |
|                             | 12/22 | 42.9            | 32.1         | 21.4       | 3.6           | 0               | -1                  | -2.4                |
| ウ) 自分の得意なことを伸ばす活動           | 4/18  | 34              | 48           | 14         | 0             | 4               | -                   | -                   |
|                             | 6/27  | 31.1            | 46.7         | 22.3       | 0             | 8.9             | -4.2                | 4.9                 |
|                             | 12/22 | 39.3            | 35.7         | 21.4       | 3.6           | 0               | -7                  | -0.4                |
| エ) 自分の苦手なことを改善する活動          | 4/18  | 26              | 36           | 26         | 6             | 6               | -                   | -                   |
|                             | 6/27  | 15.6            | 53.3         | 26.7       | 4.4           | 0               | 6.9                 | -7.6                |
|                             | 12/22 | 32.1            | 32.1         | 28.6       | 3.6           | 3.6             | 2.2                 | -4.8                |
| オ) 社会の人やことに関わり、課題の解決に取り組むこと | 4/18  | 30              | 46           | 16         | 2             | 6               | -                   | -                   |
|                             | 6/27  | 22.2            | 42.1         | 31.1       | 4.4           | 13.2            | -11.7               | 9.6                 |
|                             | 12/22 | 39.3            | 35.7         | 21.4       | 3.6           | 0               | -1                  | -4.4                |

#### ア) チームで協力して考えたり行動すること

本授業の進行方向として、また「集団で学ぶ」ことを大切にしている本校として、最も重要な活動に関する問いである。A・Bの推移を見ると、活動が進行するとともに概ね数値が好転していると読み取ることができる。

しかし、活動中も授業に参加できない生徒もいたことを考えると、「全く安心して取り組めない

(e)」の評価に一定数の生徒がいたことも、妥当性を感じる結果となった。(e)の要因として、そもそも集団に馴染むことが難しい、チームで人間関係をうまく築けない、また当初は問題なかったものの、活動の進行とともに人間関係の不調をきたすなどが考えられる。

チームで取り組む以上、これらすべてを取り除くことはできないが、このようなことが起こったときにどのように対応していくべきか、安易な回避ではなく、どのように向き合わせていく必要があるのか、という視点での指導法についても今後は研修等で考えていきたい。

#### イ) 目標を立てて、その目標に向かって取り組むこと

A・Bともに活動が進むに連れて概ね好転傾向にあるが、中間評価から成果交流イベント実施後の段階で、約1割の生徒が肯定意見から離れている。これは中間評価のタイミングの前の活動に起因していると考えられる。授業開始時から中間評価までは10時間でアクションプランを設定する活動を行っている。比較的短期間の活動であり、また動画を補助教材として用いながら取り組める方式としたことで、スケジュール設定や管理に大きく困りを感じず、安心して取り組むことが出来たのではないかと考える。

一方、中間評価以降はすべての活動をチームそれぞれで組み立て、関係先の開拓や連携の中で進めており、チームの担当教員も含め全員で考えながら進めていくことが求められた活動期間である。このような活動の差を鑑みると肯定意見が伸び悩んだことには、生徒たちの葛藤や課題意識が関連していると考えられる。

しかし、その中であっても、ガイドラインがあった中間評価の活動以降に(a)の回答が大きく伸び、(e)の回答が無くなっており、葛藤や課題意識を感じつつも、前向きに捉えられるようになったと考えられる。

さらに、目標を立てて計画的に取り組んでいくことは、ビジテックⅡの段階から共通して取り組ませている「探究ポートフォリオ」を活用しての計画的・継続的なトレーニングの先にある結果でもあり、その点ではビジテックⅡを含めた指導、また評価の視点でも考察していきたい。

#### ウ) 自分の得意なことを伸ばす活動

全体を通じて開始前よりも好転した項目である。ビジテックⅡでは「自分の得意なことを伸ばす」という視点から、興味のある2分野を選択して探究活動を展開し、ビジテックⅢではそこで得た得意分野で他者を支える活動を行っている。ビジテックⅢの最大のテーマ・ねらいは「何をするかではなくだれを笑顔にするか」としており、必ずしも自分の得意分野を活かすことや、自分の得意分野を伸ばすことが授業のねらいでないということがしっかりと生徒に伝わっていた結果が、このアンケート結果に表れていたと考えられる。

しかしその一方で、中間評価以降に、「ペルソナ分析」による自分たちの得意を活かすためのワークも実行しているが、自己理解とその投影や反映には十分に機能しなかったと評価せざるを得ない。ただこれはどちらも非常に実施者の主観が強いため、今後生徒への聞き取りを行い、得意を活かす場面をどのように効果的に取り入れていくことができるかについて検討していきたい。

### エ) 自分の苦手なことを改善する活動

他の問いと比較しても、大きく好転した項目のひとつである。「ウ) 得意なことを伸ばす活動でも」示したように、そもそも自分ができること・やりたいことから設定した探究課題ではないこと、また、「イ) 目標に向かって取り組むこと」でも示したようにチームで取り組むということ自体に課題意識を感じる生徒も少なくない本校にあって、本授業に真摯に取り組んできたことこそが、苦手なことを改善する活動であったと考えられる。中でも後者は、ともに結果が好転していることから関連性が高いと考える。

### オ) 社会の人やことにに関わり、課題の解決に取り組むこと

「集団で学ぶ」ことに加え、本校が大切にしていくことに「様々な人と出会う」が挙げられる。ビジテックⅢではその活動、および成果を「地域や社会とつながる・地域や社会に還元する」とし、活動を進めてきたことから非常に重要な問いである。

一方で、活動の進行とともに最も振れ幅が大きかった問いでもある。中間評価までに、アンケートやインタビューを行うチームはあったものの、本格的な連携を行った実績はなかった。中間評価の「お！ピニオン会」を通して初めておとなとの本格的な交流を行い、終了後にアンケートを実施したため、その場面で感じたことがそのまま回答に現れたと考えられる。

「お！ピニオン会」は生徒の活動を評価するのではなく、おとなが「それぞれの領域や得意分野の視点から応援をする場」として設定をしている。もちろん参加者にもその視点を説明しているが、実際の場面ではどうしても「良し悪しの評価」という視点での評価・コメントも見受けられたことや、そもそもおとな、特に行政職員や民間企業人といった普段接することのあまりないおとなとの対等な意見交流という場面では、緊張や不安も大きかったことがこのような評価に繋がったことは想像に難しくない。

しかし、その後すべてのチームがさまざまな協力機関との直接・間接的な関わりによって長期的な連携を行い、また 12 月 21 日には QUESTION にて一般市民に向けた成果発表を実施したうえで結果が好転している。このことから、同じ目的目標を共有し、ともに協力する関係が構築されることで苦手意識や不安要素は大きく改善されることに繋がったことが見て取れる。また A は若干減少しているものの、(a) の評価は伸びており、地域や社会に関わることに前向きな視点が身につく経験になったと評価する。その姿勢がその後の生き方・あり方につながるような関わり方・繋がり方に繋げていけるよう、今後より一層大切に展開していきたい。

### (3) 育みたい 6 つの力の伸長度（成果交流イベント「Make you smile」での各者アンケートより）

ビジテックでは、「育みたい 6 つの力」のうち、主に「コミュニケーション力」、「自己肯定感・自己有用感」、「自己判断力・行動力」、「課題発見力・解決力」の伸長を目指し取り組んでおり、その伸長度についてアンケート調査を実施した。

#### ○アンケート対象者

A：生徒 B：授業担当者 C：担当外教職員 D：インターン学生 E：来場者・関係者

## ○アンケート内容

イベントでの生徒たち（生徒へは「イベントでの自分」）の様子から、「育みたい6つ」のうち4つについて成長が見とれたもの（生徒へは「成長できたと感じるもの」）をすべて、選択してください。

アンケート結果（単位：％、下線は評価者ごとに最も高かった評価を示す）

| アンケート項目       | A<br>生徒 | B<br>授業担当者 | C<br>インターン学生 | D<br>担当外教職員 | E<br>来場者・関係者 |
|---------------|---------|------------|--------------|-------------|--------------|
| ア)コミュニケーション力  | 69.2    | <u>100</u> | 75           | 87.5        | <u>95.3</u>  |
| イ)自己肯定感・自己有用感 | 53.8    | <u>100</u> | <u>100</u>   | <u>100</u>  | 74.4         |
| ウ)自己判断力・行動力   | 53.8    | 83.3       | 75           | 75          | 81.4         |
| エ)課題発見力・解決力   | 53.8    | 66.7       | <u>100</u>   | 87.5        | 72.1         |

ここでは、Aを主観的实施者、B・Cを主観的指導者、Dを客観的指導者、Eを客観的観察者として捉え、それぞれの評価の差から考察する。

### ア) コミュニケーション力

A～Dのすべてが上位2位までの評価となった。イベントの形態として実施者も観客も「言葉のやりとり」によって情報のやり取りを行っていたことが起因と考える。また、観客の自由記述には「経験に基づく説明がなされていた」という趣旨のものが多く、ただ話すだけでなく、内容が「自分事」になっていた点が実施者だけでなく、観客からも高評価を得ることにつながったのではないかと考える。

ただ、生徒たち自身の評価は必ずしも高くはなく、理由の記述は少ないながらも「見知らぬ人と話すことや、他者と協力して取り込むことなど、さまざまな経験ができたと感じる」など、肯定的な意見がほとんどで、「うまく行かなかった」「できなかった」ではなく、「この日だけが特別に良くできたわけではない」「もっとできたのではないか」といった前向きな課題意識の現れとも受け取れる理由が記載されていた。

### イ) 自己肯定感・自己有用感

B・C・Dで最も高い評価となったが、Aではあまり高い評価にはならなかった。「自己肯定感・自己有用感」という項目だけに、最も重視すべきは主体である生徒の評価である。伸び悩んだ理由は生徒の記述からは見いだせなかったが、主体者ではあるが、当事者ではない教員やインターン学生、また担当者ではない教職員の回答者全てが高まったと評価している。理由には「生徒の顔を見ていると、人に説明すること、発表したことに大きな達成感や満足感を得ているように感じた。」などの意見が挙げられ、「観客との良好なコミュニケーションがなされた＝自己肯定感や自己有用感の向上につながった」という仮説のもとに評価されたように思われる。また来場者は

そもそもスタート視点の彼らを知らないことからその判断はこの場だけではできなかった、と推測すると、仮説はより近いのではないかと考える。また、生徒たちにとっては、発表という一場面の成功だけで自己肯定感・有用感を得られたわけではなかったと考えられる。

ここから見えてくるのは、「自己判断力・行動力」、「課題発見力・解決力」という、探究活動の質的評価に対する評価も総じて低いことを鑑みると、生徒自身が単に成果を示せたことではなく、その質にまで視点を向けられていたという、「健全な自己批判」が達成されたとも考えることができるし、また、指導者側に対しては、より質の高い探究活動の方法を検討することの重要性を指摘する結果であると考えられる。

#### ウ) 自己判断力・行動力

本項目の評価の平均値は 73.8%で、4つの項目の中で最も低い評価となった。中でも A・D の評価は最も低く、探究活動を展開するもしくは自分自身も直近で実施する立場にあったものとして、足りなかった項目、という読み取りもできる。結果だけでなく、そのプロセスに対して「まだできたことがあるのではないか」「あのとき自分はもっとできたのではないか」という自省的な視点があったと考えられる。だからこそ、今後の指導においては、方法や答えを示すのではなく、生徒たちが自分で判断・行動できる「問い」をうまく展開することがより重要である。

#### エ) 課題発見力・解決力

平均値としては3番目であるが、A・B・E で最も低い評価であり、最低評価の数では最も多い結果となった。どの視点から見ても「最も伸びしろのある部分」と評価されたと見ることができる。

授業担当者からは「自分たちが体験したことから、社会的な課題を発見したりできればよいなあと思いますが、なかなか難しいです」という声や、来場者の自由記述には、「今後については、発表だけでなく、成果を届けたい人にとってどのような形だったらより伝わるかまで発展させられると、本当に実現するものも多くあるのではないかと感じた。」といった意見があり、これらはさらに高みを目指すための指摘である。もちろん探究課題の回答としての質に対する評価と真摯に受け取り、指導や展開の改善に向けていくことも重要であるが、成果発表の質を上げる、よりクリティカルな社会課題の提案の場にする、という趣旨ではなく、「課題発見から解決のプロセスで対象に向けて活動を進める中で自己を肯定したり、有用感をより感じられるための成果の向上」に取り組むことをより大切にしていきたい。



### 3. ランアップ

#### ◆ランアップ後のアンケート 3年間比較

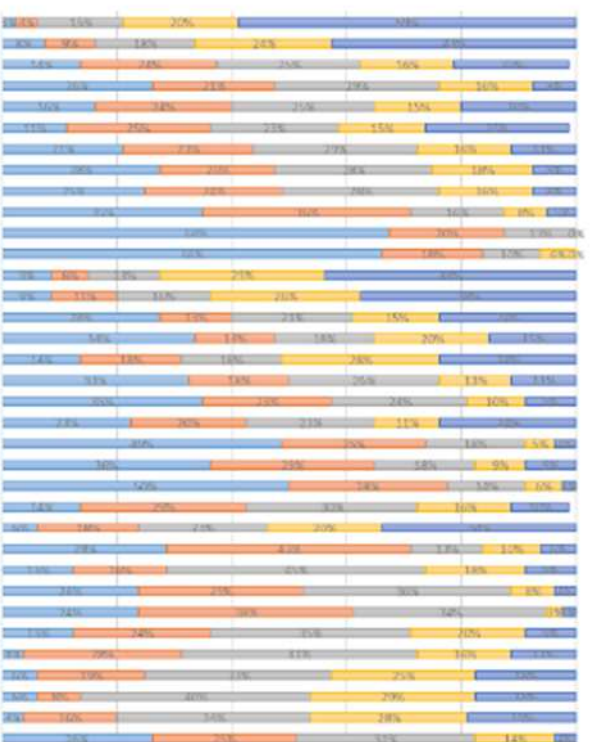
| 通番 | アンケート(%、少数第一位四捨五入)                  | R5     | R4     | R3     |
|----|-------------------------------------|--------|--------|--------|
| 1  | 国語 『できた』、『わかった』を実感できた               | 88     | 92     | 90     |
| 2  | 国語 得意・不得意を認識できた                     | 93     | 96     | 97     |
| 3  | 国語 高校の学びに意欲を持つことができた                | 82     | 88     | 86     |
| 4  | 国語 学び直しができた                         | 93     | 88     | 93     |
| 5  | 国語 自分で課題を設定し、取り組むことができた             | 79     |        |        |
| 6  | 数学 『できた』、『わかった』を実感できた               | 96     | 99     | 93     |
| 7  | 数学 得意・不得意を認識できた                     | 100    | 99     | 97     |
| 8  | 数学 高校の学びに意欲を持つことができた                | 91     | 92     | 92     |
| 9  | 数学 学び直しができた                         | 94     | 99     | 94     |
| 10 | 数学 自分で課題を設定し、取り組むことができた             | 100    |        |        |
| 11 | 英語 『できた』、『わかった』を実感できた               | 97     | 91     | 90     |
| 12 | 英語 得意・不得意を認識できた                     | 97     | 86     | 96     |
| 13 | 英語 高校の学びに意欲を持つことができた                | 88     | 86     | 88     |
| 14 | 英語 学び直しができた                         | 96     | 93     | 90     |
| 15 | 英語 自分で課題を設定し、取り組むことができた             | 96     |        |        |
| 16 | ランアップの期間について、期間が長いと感じましたか？          | 34(※2) | 41(※2) | 58(※1) |
| 17 | 教員の数は適切でしたか？(生徒5人教員1人)              | 96     | 96     | 92     |
| 18 | 学習計画 → 学習 → 振り返り の段取りは、学習しやすかったですか？ | 97     | 97     | 92     |

アンケートの回答は『できた』、『どちらかというときできた』、『どちらかというときできなかった』、『できなかった』の4段階から選ぶ形式で、そのうち『できた』、『どちらかというときできた』の肯定的回答を合わせたものの比較である。いずれの年度も肯定的回答が80%を超えており、ランアップの学習形態に学びやすさを感じている生徒が多いことがわかる。また、今年度より、ランアップで生徒が取り組む際に、担当者の意見を加味するようにしていたが、そのことでアンケートの結果が、否定的な側に振れるようなことはなかった。

## ◆R5 意識調査 比較

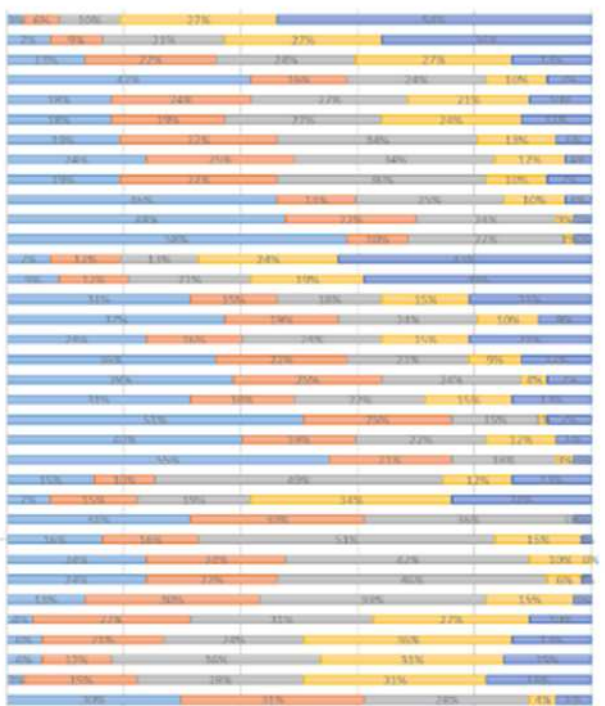
4月

- 【質問35】【英語12】 まとまった内容を、次の例文程度の長さの英文で表現することができる。
- 【質問34】【英語11】 次の例文のように、ある程度の長さの英文を読んで理解することができる。
- 【質問33】【英語10】 助動詞 (can, will, must など) の使い方が分かる。
- 【質問32】【英語9】 主題に合ったbe動詞 (am, are, is) を選ぶことができる。
- 【質問31】【英語8】 簡単な否定文 (～ではない) や疑問文 (～か?) を作ることができる。
- 【質問30】【英語7】 簡単な文 (I know him など) 級～5級程度の文) を自分で作ることができる。
- 【質問29】【英語6】 日本語に対応する代名詞 (I, they など) が書ける。
- 【質問28】【英語5】 代名詞 (I, they, he, us など) の意味が分かる。
- 【質問27】【英語4】 単数と複数のかし方の違いが分かる (a pen, pens など)。
- 【質問26】【英語3】 pasta, candy など簡単な単語を知ることができる。
- 【質問25】【英語2】 ローマ字の読み書きができる。
- 【質問24】【英語1】 アルファベットの読み書きができる。
- 【質問23】【数学11】 例題のような、二次関数のグラフを書く。
- 【質問22】【数学10】 例題のような、一次関数のグラフを書く。
- 【質問21】【数学9】 例題のような、式を因数分解する。
- 【質問20】【数学8】 例題のような、式を展開する。
- 【質問19】【数学7】 例題のような、二次方程式を解く。
- 【質問18】【数学6】 例題のような、一次方程式を解く。
- 【質問17】【数学5】 例題のような、式の中の文字に数を代入して式の値を求める。
- 【質問16】【数学4】 例題のような、平方根のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問15】【数学3】 例題のような、文字を使った、たし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問14】【数学2】 例題のような、分数のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問13】【数学1】 例題のような、整数のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問12】【国語12】 作者と話し合う。
- 【質問11】【国語11】 自分の意見を発表する。
- 【質問10】【国語10】 作者の意見を聞く。
- 【質問9】【国語9】 「もっと」に対して「～だろう」や「～まったく」に対して「～ない」など、対応する語が分かる。
- 【質問8】【国語8】 「そして」や「しかし」などの接続詞により、前後の文の関係が分かる。
- 【質問7】【国語7】 「これ」や「それ」などの指示語の内容が分かる。
- 【質問6】【国語6】 文中の主語と述語の対立関係が分かる。
- 【質問5】【国語5】 「電光石火」などの、基本的な四字熟語の意味が分かる。
- 【質問4】【国語4】 「朝からばたもち」のような、基本的なことわざ・慣用語の意味が分かる。
- 【質問3】【国語3】 「関心」に対しての「介入」など、基本的な語彙の類義語や対義語が分かる。
- 【質問2】【国語2】 中学までの漢字を書く。
- 【質問1】【国語1】 中学までの漢字を読む。



6月

- 【質問35】【英語12】 まとまった内容を、次の例文程度の長さの英文で表現することができる。
- 【質問34】【英語11】 次の例文のように、ある程度の長さの英文を読んで理解することができる。
- 【質問33】【英語10】 助動詞 (can, will, must など) の使い方が分かる。
- 【質問32】【英語9】 主題に合ったbe動詞 (am, are, is) を選ぶことができる。
- 【質問31】【英語8】 簡単な否定文 (～ではない) や疑問文 (～か?) を作ることができる。
- 【質問30】【英語7】 簡単な文 (I know him など) 級～5級程度の文) を自分で作ることができる。
- 【質問29】【英語6】 日本語に対応する代名詞 (I, they など) が書ける。
- 【質問28】【英語5】 代名詞 (I, they, he, us など) の意味が分かる。
- 【質問27】【英語4】 単数と複数のかし方の違いが分かる (a pen, pens など)。
- 【質問26】【英語3】 pasta, candy など簡単な単語を知ることができる。
- 【質問25】【英語2】 ローマ字の読み書きができる。
- 【質問24】【英語1】 アルファベットの読み書きができる。
- 【質問23】【数学11】 例題のような、二次関数のグラフを書く。
- 【質問22】【数学10】 例題のような、一次関数のグラフを書く。
- 【質問21】【数学9】 例題のような、式を因数分解する。
- 【質問20】【数学8】 例題のような、式を展開する。
- 【質問19】【数学7】 例題のような、二次方程式を解く。
- 【質問18】【数学6】 例題のような、一次方程式を解く。
- 【質問17】【数学5】 例題のような、式の中の文字に数を代入して式の値を求める。
- 【質問16】【数学4】 例題のような、平方根のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問15】【数学3】 例題のような、文字を使った、たし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問14】【数学2】 例題のような、分数のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問13】【数学1】 例題のような、整数のたし算、ひき算、かけ算、わり算を計算する。
- 【質問12】【国語12】 作者と話し合う。
- 【質問11】【国語11】 自分の意見を発表する。
- 【質問10】【国語10】 作者の意見を聞く。
- 【質問9】【国語9】 「もっと」に対して「～だろう」や「～まったく」に対して「～ない」など、対応する語が分かる。
- 【質問8】【国語8】 「そして」や「しかし」などの接続詞により、前後の文の関係が分かる。
- 【質問7】【国語7】 「これ」や「それ」などの指示語の内容が分かる。
- 【質問6】【国語6】 文中の主語と述語の対立関係が分かる。
- 【質問5】【国語5】 「電光石火」などの、基本的な四字熟語の意味が分かる。
- 【質問4】【国語4】 「朝からばたもち」のような、基本的なことわざ・慣用語の意味が分かる。
- 【質問3】【国語3】 「関心」に対しての「介入」など、基本的な語彙の類義語や対義語が分かる。
- 【質問2】【国語2】 中学までの漢字を書く。
- 【質問1】【国語1】 中学までの漢字を読む。



ランアップアンケートとは別に、国数英各教科の苦手意識の変化を見るために、意識調査を実施している。

結果として、大きく意識が変わる様子を読み取ることはできないが、４月から６月で苦手意識が高くなる項目もあり、苦手を意識できるようになっている項目もある。また、質問１１の「自分の意見を発表する」に苦手意識がある生徒が多いことがわかる。今年度卒業生に実施した、卒業年次生のアンケートを行った中に、「本校で伸ばせた力は？」という質問に対して「話す力」を挙げている生徒が７６％あった。このアンケートでは全般的にコミュニケーション力が付いたと答えている生徒が多かったが、本校の集団を意識した授業形態がこの結果につながっていると考えられる。

## IV 次年度以降の課題及び改善点

### 1. 奏和タイム

今年度、外部団体と学校との連携は、会議の在り方や、報告方法などについて、一定の形が出来上がり、生徒の見取りをよりよい形で共有することが可能となった。現状校内では、教員やスタッフの生徒に対する気付きを入力して、共有する仕組みがある。教員や外部人材など、日々の生徒の見取りの情報が膨大となる中で、憩いの場での生徒の様子や、話の内容の情報をどの程度収集していくべきなのかは今後も検討の必要がある。

### 2. ビジテック

ビジテックⅠ・Ⅱは、「習得のターン（知識・技術の習得）」・「企画・設計のターン（実行可能なプランの思考・判断・表現）」・「探究のターン（自己課題への主体的な取組）」という「奏和版探究のサイクル」を軸に据えた指導、またその活動を可視化する「探究ポートフォリオ」による指導および評価を行うことで、生徒の選択した分野に関わらず、一貫した探究能力の育成につなげることができている、という昨年度までの考察に大きな変化はなく、今年も行ったマイナーチェンジを、単に構築期の一過性のものとしてではなく、生徒の実態、時代や環境のニーズにアジャストしていくことを大切にしていきたい。とくに、普通教科の授業担当者によって運営可能でありながらも、「実社会の創造・生産を経験的に学ぶ」という目的を達成できる視点や体制による実験的な授業やその他活動を模索・構築していきたい。

ビジテックⅢは、さまざまな外部資源とのつながりを模索・構築しながらの授業運営であったため、通常の運営体勢としての良し悪しを評価できる段階ではないが、確実に言えることは、「生徒の主体的・能動的な活動は、それを支えるおとなの原動力となりその力は循環する」ということである。

探究の指導に関しては、全国的にもそのスキルが課題とされている。この課題に対し、ビジテックⅢの授業成果から2つの方法によって好循環を生む出すことができた。

1つは、生徒が主体的・能動的に活動できる授業づくりである。そのために大切にすることは、①課題設定におけるものがたりとそのプロセス、②対象を明確にすること、である。①では中間年次の3学期からイントロダクション的に課題を示し、またゴールデンウィーク明けまでの11コマもの時間、集団と個人のワークを交互に展開しながら拡散と収束を計画的に進めさせ、課題に丁寧に向き合わせる展開を行った。ここでは、外部ファシリテーターとの丁寧な打ち合わせによるコンセプトメイクが重要であった。「指導のしやすさ」という視点ではなく、教育現場だけではない視点を取り入れながら「どのように課題に出会わせるか」を重視したことによって、課題との出会いを丁寧にファシリテートした。

②は実社会的な創造・生産活動を経験的に学ぶことを目指すビジテックとして、対象の創造と捉え方の観点を大切にしたい。またチーム形成段階では、「だれとやるかではなくだれにするのか」が重要であることを大切に、あくまで「同じ対象を笑顔にしたい人でチームをつくる」ことにこだわった。序盤は不服を言う生徒や授業に前向きに参加できない生徒もいたが、チーム変更や、継続的

な授業への不参加で不履修となる生徒は一人もいなかった。このようなことから、課題の設定が十分になされることは、生徒が主体的に取り組むための素地となるものであり、ここに多くの時間や、多様な視点、手法を取り入れたことは非常に有効であった。

2つ目は、中長期的な視点に立った探究指導者の育成である。これは先にも述べた「SOU-TERN」に当たるが、5年後10年後の教育を考えて取り組むことの重要性に加えて、ともに活動することによる生徒・教職員自身が受ける刺激も大きかった。中でも、成果交流イベント「Make you smile」の当日の全体運営を、大学生に任せることで、非常に重要な役割を円滑に担っていただけた。教職員の職務は教科指導だけでなく、文化祭や体育祭といったさまざまな学校行事を行うことなど、多岐に渡るものであり、そのような仕事が存在することはもちろん、経験するのは、大学ではあまりない機会である。このような機会を学生が経験すること、また教職員もその過程を自身の教育活動と照らし合わせて内省するきっかけとすることは、非常に意義があった。

これら2つのことを通じて、生徒たちは探究する対象にも、その解決方法の模索や実行にも、そして自身の経験に裏付けられた等身大の成果交流においても、非常に前向きで主体的な姿を示してくれた。このような生徒たちの頑張りに引っ張られるように、授業担当者が課題意識を持って主担当者に相談する場面が生まれ、その声に行政や企業が持ちうる様々な人的ソースを提供することによって、生徒を起点とした好循環が常に回り続けていた。もちろんそこには、その全体を指揮する主担当者の役割も必要なものであり、アンケート等からも、評価の一方で「だれにでもできる仕組」を求める声が聞かれた。探究の指導法のマニュアル化は非常に難しい課題であるが、授業を、運営の視点からではなく、さまざまな人的・物的・環境的な資源に教職員がアクセスすることやその能力開発を行うこと。そして助け補い合う関係構築を探究していくことこそが、探究活動の指導者に必要な資質・能力であると考え、ノウハウの蓄積などその醸成に今後も寄与していきたい。

### 3. ランアップ

本校は困りを抱えた生徒が集って、ともに学びあい育ちあう学校である。そんな生徒たちが本校に求めていることの中に、「学び直し」は大きなウエイトを占めている。そのため、1年生4月から行うランアップは重要な役割を持つが、1月半ほどの間で基礎学力を大きく伸ばすことは難しい。しかし、生徒たちは、この期間があることで、「学び直しができた」と感じ、その後の高校での学びにつながったと感じている生徒が多い。

ランアップのメリットは、

- ・生徒のペースで学習を進めることができる。
- ・多くの教員が新入生と関わるができる。

の2点である。1点目は生徒アンケートの結果からも、ランアップの授業が生徒にとって学びやすいものであり、現状の進め方が妥当であることがうかがえる。一方で、2点目のメリットをいかにその後の学習活動に活かしていくかや、ランアップでの取組を、その後の生徒たちの学びやすさや、学ぶことへの意欲につなげることができるかが大切である。

今年度実施した卒業年次アンケートにおいて、「各教科の学びやすさ」は、すべての教科において、5段階評価のうち「とても学びやすかった」「学びやすかった」が60%を超える結果であった。ラ

ンアップでの取組が、その後の学びへ活かされていることの一定の表れであると捉えられる。

一方で、ランアップ期間に生徒の学習への困りを見取り、各教科で情報を共有し、それぞれの授業へ反映することが重要であると認識しているものの、有効に情報を集めて共有するまでには至っていない。引続き、集めるべき情報の整理と活用方法・活用場面の設定が必要だと感じている。

また、学習意欲のある生徒のための環境整備も大きな課題である。本校ではカリキュラム上の都合により、放課の時間（奏和タイム）の補習等が行いにくい状況があり、学習意欲のある生徒のサポートや、家庭学習が行いにくい生徒への環境整備等が行えていない状況である。

その対策の一つとして、今年度、本校スーパーバイザー 小谷裕美 京都教育大学教授とのつながりから、京都教育大学の講座の実習の一環として、本校の総合育成支援のスタッフと連携し、自主学習の支援を試みた。今後は教員を目指す学生にも、本校の生徒・教員にもメリットがある取組となるよう、継続していく。

また、本校で伸ばしたい 6 つの力として、「高校での学びの土台となる学力」「進路を切り開くための学力」「コミュニケーション力」「課題発見力・解決力」「自己判断力・行動力」「自己肯定感・自己有用感」を挙げているが、どの力をどのような場で伸ばしていくか、どうなったらその力がついたといえるかということが明確になっていない。そこで、社会で自立していくために必要な汎用的な力として、「コミュニケーション力」「課題発見力・解決力」「自己判断力・行動力」「自己肯定感・自己有用感」を掲げ、学校設定科目の「キャリアⅠ～Ⅲ」と総合的な探究の時間「ビジテックⅠ～Ⅲ」の授業でどの程度力が付いたかを見取ることに取り組んでいくことにした。このことによって、各教科での取り組み方や、アウトプットの方法、共有の仕方などで、目指す方向性が明確化され、統一性が生まれることを狙っている。これらの取組により、生徒も統一感のある授業が受けられ、その授業の意味合いや、関連性が感じられ、学びやすさを感じることができると期待される。そのうえで、「高校での学びの土台となる学力」「進路を切り開くための学力」を伸ばすために、各教科で個の状況に合わせてアプローチしていく。